私 の 研 究 生 活

—連載第２回—

京都府職員　宮 田　英 樹さん

～大切にしたい「信頼」と「絆」～

インタビュアー　大 空　正 弘（博士前期課程　2009年度生）

京都府職員から大学院へ

【大空】同志社大学大学院総合政策科学研究科関係者が自らの研究にどのように取り組んでいったのかをレポートする「私の研究生活」。今回からは博士前期課程2009年度生の大空正弘が担当いたします。連載第２回目は、京都府で職員として活躍されている、宮田英樹さんです。宮田さんは社会人大学院生として、京都府職員としての仕事のかたわら、博士前期課程の公共政策コースを修了されました。まず、総合政策科学研究科に入学された経緯からお伺いしてもよろしいですか。

【宮田】京都府には、民間企業や大学院への派遣研修制度があり、それを活用して入学しました。総合政策科学研究科への派遣は私が初めてだったので、当初は要領が掴めず苦労しました。しかも、かれこれ20年以上、勉強していませんでしたし。後になって、総合政策科学研究科を修了、または在籍中の京都府職員の方が多くいらっしゃることを知り、もっと早く分かっていたらいろいろと相談できたのにと後悔しました。

【大空】京都府の派遣研修制度を活用されたと

いうことですが、この制度について少しご説明いただけますか。

【宮田】今、社会経済情勢は目まぐるしく変化していますよね。自治体は、それに的確に対応していかなければなりません。また地方分権時代にふさわしい京都府政の展開を推進することも求められています。そうした状況に適応できる人材を育成しようと設けられているのが派遣研修制度なんです。総合政策科学研究科の他に自治大学校や早稲田大学大学院など、課題に応じて勉強できる機会が与えられているんですよ。

【大空】京都府の制度と宮田さんの想いが一致したということでしょうか。

【宮田】そうですね、期待に応えられるかどうかは分かりませんけど（笑）。しかし自治体職員にとって大学院で研究できるというのは、いい刺激なります。私たちは実務として政策検討を行っていますが、理論研究の時間がなかなかとれません。独学で勉強している職員も多いんですよ。しかも、今日では、多元的な主体が公共的サービスを担うガバナンスという新しいかたちづくりが進められており、NPOや企業、大学等の思惑も念頭に置かなければなりません。政策の必要性を社会的背景や効果を踏まえ、しっかりと語ろうとするとき、理論研究は欠かせませんし、それと同時に、私たちには高度な説明能力が求められているのではないかと思うのです。

あと、事実認識を誤らない力をつけて、社会のありたい姿を見つけたかったということもあります。現在、京都府では総合計画が平成22年に期間満了を迎えることから、新たな理念・ビジョン等についての検討を開始しています。長期ビジョンとして、将来の京都府社会のありたい姿などが議論されているのですが、市民や自治体、企業などを含めた地域社会のありたい姿を自分なりに描いてみたかったですね。そうした理想に少しでも近づけるためにさまざまな政策研究があるのだと思いますから。

「現場」の視点からの研究

【大空】社会のありたい姿を地域の方々と共有してその実現を目指す。まさに、自治体の方の仕事ってそういうものなのでしょうね。宮田さんは、普段はどういうお仕事をされているのですか。

【宮田】　私は、「地域力再生プロジェクト」という事業を担当しています。現代社会におけるコミュニティの弱体化、東京一極集中、地域文化の衰退や児童虐待の増加などの地域発の問題の多発化等、日本社会を支えてきた「信頼」や

～コラム　京都府地域力再生プロジェクトの実施事業（平成19・20年度）～

地域力再生活動のパワーアップを支援

○地域力再生プロジェクト支援事業交付金により、地域力再生活動を財政面から支援
（２年間で700件以上の活動を支援）
○活動の担い手となる人材養成を行う「わくわく塾」の開催
○民間の中間支援組織による支援体制の整備
○専門的アドバイザーの派遣
○農村集落での「ふるさと共援組織」活動の推進 など

広報PRの支援と、出会いつながるネットワーク、行政との協働を推進

○活動を現場で学ぶリレー塾や、集中的な共同PR「地域力再生コラボ博覧会」の実施
○団体間の交流・ネットワークづくりを応援するフォーラム（コラボカフェ）の開催
○地域力再生コミュニティサイトの構築・運営支援
○優秀な活動の外部評価でベストプラクティスを選ぶ「ここいちコンテスト」の開催
○民間と行政との協働提案を募集する「京のチカラ・明日のチカラ コンクール」の実施
○民間と行政との協働を進めるテーマ別プラットフォームの開催
○同志社大学、京都府立大学と連携した大学生向け教育プログラム（教育GP）の実施 など

「絆」という地域の社会基盤が崩壊しつつある状況は、何とかしなければならない喫緊の課題ではないでしょうか。そこで、人と人とのつながりを強め、地域づくりを担う市民、NPO、行政、企業、大学など多様な主体が協働し、地域の課題解決や魅力アップを図る力＝「地域力」を再生し、自立した地域社会の新しいモデルを創ることを目指して、平成19年度からスタートした事業が「地域力再生プロジェクト」なんです。やはりそこには、真の住民自治社会の実現、新しい公共の形成といった地域社会のありたい姿があるんです。

その答えは簡単に導き出せるものではありませんが、プロジェクトによってNPO法人だけでなく、自治会や任意団体の方との関わりもでき、地域を超えた共通の課題の発見などを通じて、解決に向けた取組の輪が徐々に広がっています。今は、この輪を広げていくことが、ありたい姿の実現につながるのだという気持ちでやっています。

【大空】なるほど。御担当の業務を発展的に展望したいとの気持ちから、「現場」の視点での研究が始まったのですね。

【宮田】ええ、「地域力再生プロジェクト」のように、地方自治の原点は地域にあるという初心にかえったとき、次に必要になるのは市民の方々との「協働」作業です。

今、自治体ではパートナーシップ型の行政が主流ですよね。でも、現場の自治体職員は結構悩んでいます。昨年、先進自治体と呼ばれていた市をいくつか訪ねたのですが、やはり担当者は苦労している様子でした。簡単に言えば、理念と現実とのギャップということでしょうか。市民参加といっても全市民が参加することはあり得ないですよね。しかも法令や規則は遵守しなければならないですし、何と言っても「協働」は効率が悪い。財政健全化が叫ばれ、人員が減少する中で「協働」を推進するということは、実はベクトルが逆なんじゃないかなと思うのです。「協働」とは、業務委託や指定管理者制度で民間に任せるということだけではないですし、公共的サービスを管理しようとすれば新たな規制行政も求められます。さらに「新しい公共」の形成を目指すのであれば、地域における公共的サービスの状況を把握・分析する役割も必要になってきます。NPO団体は自己実現のために活動しているのであって、自治体のために活動しているわけではないですから。

誤解のないように言っておきますが、私は「協働」を否定するつもりはありません。言いたいのは、本気で「協働」を推進しようとするならば、市民と行政の関係は「緊張」の連続になるはずであり、これほど労力のかかるものはなく、また自治体職員には非常に高いレベルの能力が必要になるはずだと思うのです。中途半端では、市民に本気度は伝わりません。最近では、新自由主義の小さな政府路線に対する見直し論も出てきていますが、パートナーシップ型行政を進めるに当たって、自治体には何か新たな役割があるのではないか、また都道府県として求められる役割は何なのか、という疑問から研究を進めました。

【大空】それが「地方自治体の新たな役割―公共政策のコラボレーション形成手法―」という研究テーマにつながるのですね。

信念の１年間

【大空】お仕事と研究との両立は大変だったと思いますが、いかがでしたか。

【宮田】「大変ですね」とよく言われましたが、職場の方々には大学院の研究優先で配慮いただきましたし、私にとっては「研究テーマ＝仕事」でしたので、正直そんなに大変だと思ったことはないんですよ。地域力再生リレー塾やコラボカフェといった仕事での市民活動団体との交流が、すべて研究材料になりましたので、とりたてて苦労もなかったです。修士論文を執筆し始めてからは、文才の無さもあって精神的に少し追い込まれましたが。

【大空】「研究テーマ＝仕事」と、まさに両立されていたのですね。宮田さんは博士前期課程を１年間で修了されましたが、その研究生活はどのようなものでしたか。

【宮田】「大学院に入った以上、研究者として自分なりの課題を持ち、私はこうだという気持ちをもつことが大切。そういう意味で研究者は孤独だ。」これは、指導教員である今川晃先生が初日のゼミの冒頭で言われた言葉で、今でも記憶に残っています。孤独と批判を乗り越えて、信念を曲げずに忍耐強く研究することが重要な

のですが、私の場合、信念を持つまでに時間がかかりましたね。

その理由は、解決に向けて研究すべき自治体の課題は山積しているのですが、それが市民にとっても課題なのかという不安です。推察だけで形成した信念ほど崩れやすいものはないですからね。しかし、多くの市民活動団体との交流を通じて、地域のために貢献したいという市民の方が多いことが確認できましたし、地域力再生プロジェクト支援事業交付金についても自己負担が必要にも関わらず、２年間で700を超える活動に交付決定を行ったという事実もあり、こうした動きをステップアップするための新しい仕組みの必要性を肌で感じ取ったのです。それは京都府民の数パーセントに過ぎないかも知れませんが、地域のために汗を流す市民を応援したいという気持ちが沸きますよね。

そう考えると、フィールドをもつことの大切さがよく理解できます。フィールドには、課題があり、解決の糸口があり、共感や反論してくれる人々がいます。自分の研究の意義や有用性を見出すこともありますが、何よりも自分の研究が実社会の中のどこに位置づけられるのかが認識できます。フィールドは、揺るぎない信念を構築することができる研究者の原点ではないでしょうか。

後は、少しでも知識不足を解消しようと読書に時間を費やしました。普段、雑誌ぐらいしか読まなかったですから。この１年で10年分読書した感じです。佳境に入ったときなどは、連日明け方まで読みふけっていたんですよ。笑い話ですが、一時期、家族からおかしくなったと気味悪がられたこともありました。

そして１年間という制約があったので、ほとんど毎日講義を受けに来ていましたね。府庁から自転車で通い、少しくらい痩せるかなと期待しましたが、叶いませんでした。１日だけ発熱で休みましたが、それ以外は出席しました。私をそうさせたのは、講義の中に自分の研究のヒントがあるんじゃないかという期待感でした。聴き逃したらもったいないですし、実際に多くの先生方からいろいろな考え方を教示していただきました。特に、研究に関係する新たな理論を教わったときは、道が開けたような、すごく得した気分になりましたよ。

【大空】研究に対する信念が実った１年間というわけですね。ところで、宮田さんは20数年ぶりに学生になられたわけですが、大学院での学生生活で印象深かったことや思い出話などお聞かせください。

【宮田】入学して最も良かったことは人脈が広がったことです。先生方はもちろん、さまざまな職種の社会人の方や学部を卒業されたばかりの若い方など、この１年で多くの人に巡り会えました。人脈は財産とも言いますからありがたいですね。

思い出もたくさんできました。ゼミで三重県紀北町の合併後のまちづくりについて調査し、院生で執筆した調査報告書が『地域政策』という雑誌に掲載されることが決まったことは嬉しかったですし、また、文部科学省が選定する教育GPに、「地域力再生プロジェクト」も関係する、政策学部の「政策提案能力を養う理論と実践との交流教育」が採択されたときは、「さすが同志社だな」と感心しました。あと、私は参加できませんでしたが、全国大学政策フォーラ

宮田　英樹（みやたひでき）

1964年生まれ。京都府舞鶴市出身。同志社大学大学院総合政策科学研究科博士前期課程修了（2008年度生）。総合政策科学研究科在籍当時は今川晃教授のゼミナールに所属。研究テーマは「地方自治体の新たな役割―公共政策のコラボレーション形成手法―」

ムや京都府主催の「ここいちコンテスト」や「政策のタマゴ」にも積極的にチャレンジされ、それぞれに優秀な成績を残されるなど、院生、学部生の方々のパワーには常に圧倒されていました。

逆に心残りだったのは、せっかくの学割があまり使えなかったことと、もう少し飲みに行きたかったことかな。特に、秋以降は論文執筆のため、ほとんど飲みませんでした。楽しそうにみんなが飲みに行くのを寂しく指をくわえて見ていましたね。その反動が今になってでてきていますけど（笑）。

市民に信頼される自治体職員へ

【大空】総合政策科学研究科で研究されたことは、今後どのように活きていくと思われますか。

【宮田】「虎穴に入らずんば虎児を得ず」という諺がありますが、総合政策科学研究科への入学は私にとってまさに冒険でした。入学してはじめて、個々の諸科学や狭い問題意識にとらわれずに、それらの理論を総合して問題解決に取り組むという総合政策科学研究の必要性が分かってきたような気がします。

私が、探求したい事項に「個」の問題があります。私は住民自治の源になるのは個人のパワーだと思っています。選挙や住民投票といった多数決原理、すなわち集計型の民主主義が先行し、討議の場の創出を後退させているのではないかと。日本人は議論を好まない民族だからと仕方ないよと言われたらそれまでですが、マイノリティの主張に耳を傾けないことが多すぎるのではないでしょうか。このような姿勢が利己主義ともあいまって、人と人とのつながりを薄れさせ、「個」を「孤」として埋没させているのではないかと思うのです。個人の生き方そのものを変えなければ変化は生まれない。そのための「自治自立の人民」なんでしょうね。せっかく同志社で学ばせていただいたので、建学の精神にも思いを馳せながら、自分の中にある固定化した観念を解き放ち、柔軟な発想で研究していきたいですね。

【大空】そうですか。では、宮田さんご自身の今後の将来像としてどのようなものをお持ちですか。

【宮田】将来像ですか。語るだけで若返ったような気がしますね。でも、おそらく公務員をしているのでしょう。道州制で都道府県はどうなっているか分かりませんけど。今、公務員は斜陽産業だという方もいらっしゃいます。確かにお金がない、人が減る、でも仕事は減らないといった閉塞感が漂い、全体的に少し元気がないかも知れません。特に小規模の市町村の職員さんなどは一人で多くの担当業務を抱えておられます。だから目の前にある業務で精一杯で、ある程度、専門性に欠けてしまうのはやむを得ないですし、正直な話、「協働」といってもとてもじゃないけど手が回らないのです。だから、間接行政などという固定観念をとっぱらって、積極的に市町村の手助けをしていくのも都道府県の役割だと思うのです。そういう意味で、「地域力再生プロジェクト」は市町村の仕事ではないかと言われる方もいらっしゃいますが、私は全くそうは思いません。

公務員に対する風当たりは強いです。もちろん私たちは襟を正さなくてはいけません。でも市民の視線ばかり気にして、「事なかれ主義」で仕事をしていても全然おもしろくありません。だから大胆に、かつ明るく元気に、市民に喜ばれる仕事ができていたら、いいなと思います。

【大空】例えば、市民の方に喜ばれる仕事をするために、宮田さんが大切にされていることがありますか。

【宮田】これは、総合政策科学研究科で勉強させていただいたことなのですが、私の中で「信頼」という言葉がひとつのキーワードになっています。

例えば新川達郎先生は、著書の中で「自治体職員も市民としての自覚を持つことが重要」と論じられています。私たち自治体職員は、まず市民としての意識を持つことが大切であり、地域社会において自立した責任ある市民としての行動と発言を求められる存在でなければならない、と言われています。また今里滋先生の「分権型社会の自治体は、数年ごとの人事異動は原則廃止し、職員の継続性を確保するべきである」との論述も拝読しました。我々も気がつかない旧態依然とした体質が、結果として市民の「信頼」を失わせしめていることを説いておられます。やはり公務員である以上、市民に「信頼」

される職員であり続けたいですね。

みなさんへのメッセージ

【大空】それでは最後に、総合政策科学研究科のみなさんにメッセージをお願いできますか。
【宮田】大空さんもそうですがみなさんよく勉強されていますよね。私の若い頃と比べたら雲泥の差で、すごいなと感心しています。総合政策科学研究科には優秀な方が揃っているからでしょう。だから釈迦に説法だと思いますが、ひとつだけ肝に銘じていることをお話しします。それは驕らないことです。

感謝の気持ちってすごく大事だと思うんですよ。ソーシャル・キャピタル風に言うと「互酬性規範（互いに与え合う意識）」になりますか。私が総合政策科学研究科で勉強できたのも家族や職場の方の理解があったからこそです。私は京丹後市に住んでいます。だから、単身赴任で大学院に行くなんていったら、家族は猛反対するだろうなと思いつつおそるおそる相談したのですが、あっさり「いいよ」って。ひょっとしていなくてもいいのかと不安さえ抱きましたね。たまに帰ってもみんな嬉しそうにないですし…（笑）。でも家族のおかげですね。

あと、職場には「同志社通信」というレポートをメールで配信していました。早稲田大学大学院で研究されている方が「早稲田通信」っていうのを出しておられて、それを真似たんです。京都府の制度を活用して研究している身分ですから、大学院で学んだこと、先生の話などを職員間で共有することは大切だと思いまして。これも一つの感謝のしるしでしょうか。最初は一部の職員のみに配信していたのですが、後に京都府の全職員が見られるようにしてもらったんですよ。いろんな意見が返ってきて、それも楽しみでしたね。

「誇り」と「驕り」は似て非なるものですよね。実はすごい人なんだけど気さくで誰とでもうまくコミュニケーションをとることができる方っているでしょう。私はそんな人に憧れるんです。大学院で研究しているみなさんは見識が深い。スペシャリストであり他人からも一目置かれたりします。しかし､才能を誇ると「驕り」になってしまいます。一人の知識なんて知れています。驕ることなく、人とのつながりを大切にして自らのネットワークを育んでいけば、他人の知識も自分の知識になり、しかもそこから新しい発想が芽生えることだってあります。

研究者として信念を貫くために孤独と戦うのも大事。でも「地域力再生プロジェクト」ではありませんが、人と人との「絆」をより強いものにして、そして仲間同士で大いに議論もしてほしいです。
【大空】本日はありがとうございました。私としても宮田さんのように研究者として驕らず、真摯に研究に励んでいこうと思います。今後の宮田さんのご活躍を祈念しております。

宮田さんの仕事風景

募集しています

「私の研究生活」では、読者のみなさまからのご意見、ご要望、ご感想をお待ちしております。どんなことでも結構ですので下記の連絡先までお寄せください。この企画は読者のみなさまとともに作り上げていくことを目指しています。

「私の研究生活」企画部会
大空正弘　mohsora@gmail.com